

書評

## 伊藤徳正著 『ベドフォードの会計思想』

市野 初芳

2011年3月、伊藤徳正先生による『ベドフォードの会計思想』が愛知学院大学産業研究所の若手研究者支援プログラムによる支援を受け、成文堂から出版された。本書は、伊藤先生によるベドフォード会計理論の体系的な究明を試みた研究書であり、その成果を世に問うものである。本書の特徴は、ベドフォードの主張する操作主義に立脚した会計理論の本質およびその背景となる会計思想を探求し、現代の多様な会計上の諸問題を思考するうえでベドフォード理論はいまだ有用であり、現代的意義をもつものであると主張している点にある。

なぜ著者は、ベドフォードの学説研究を志したのか。本書の“はしがき”にも書かれているが、それは恩師藤田幸男先生のご指導によるものである。藤田先生は、アメリカ留学中イリノイ大学でベドフォードから直接指導を受けた研究者であり、ベドフォードの著書『利益決定論』がわが国出版されたときの翻訳者の一人である。また、藤田先生は、学説研究を行うことの重要性を常に説かれていた。「一人の学者の理論および思想は自己の属する学問領域だけでなく、関連諸科学から直接的・間接的に影響を受けながら形成されるものである。したがって、その学者の思想的源泉を特定の先人に求めるのは困難であるが、しかし、こうした作業を少しでも進めることができれば、その学者の理論をより正しくかつ深く理解することができる」と指導されていたので、著者がベドフォード研究に傾倒していった理由が推察できる。

本書は、6つの章から構成されており、第1章ではベドフォードの略歴および研究業績が紹介されている。つづく第2章から第6章は、ベドフォードの教育観を含めた会計理論および思想が詳細に検討されている。研究の中心は、ベドフォードが1965年に公表した『利益決定論－会計理論的フレームワーク』である。1960年代は、アメリカ財務会計理論が大きな節目を迎えた時期であり、従来の伝統的理論に対し創造的、革新的な思考が提示された転換点であった。ベドフォードは、『利益決定論』で多様な利益概念の本質を明らかにし、それをより精緻に測定するための理論的フレームワークを提示した。ベドフォードが操作主義理論

に立脚した利益概念を提示し固有の理論を展開したのは従来の伝統的理論への挑戦であり、会計の社会的役割を問い直すための試みであったと思われる。

著者は、第2章で1950年代に公表されたベドフォードの論文を起点とし、『利益決定論』さらに1973年に公表された『会計ディスクロージャーの拡張』等を取り上げ、ベドフォードの会計理論および会計思想の全体像を描写することに努めている。続いて第3章では、1966年アメリカ会計学会より公表された『基礎的会計理論 (ASOBAT)』は、ASOBAT作成委員会の主要メンバーであったベドフォードの思考を大きく反映したものではないかという大胆な仮説のもとで、ベドフォードの諸説を検証するという興味深い内容である。第4章では、ベドフォード理論の重要な概念である操作主義理論の源流をたずねている。著者は、物理学者であるブリッジマンの所説を検討するとともに、バッテリー、プリンス、マテシッチの操作主義理論を検討し、ベドフォードの理論の意義およびその特徴を鮮明に描き出している。

ここから、ベドフォードの異なる側面が描かれている。ベドフォードは、アメリカ財務会計理論の形成に影響を与えた研究者であることは疑う余地はないが、ひとりの教育者としても傑出した才能と教育について高い見識をもっていたことが第5章で明らかにされている。最後に、第6章では、ベドフォードの思想が、アメリカにおける政策のサイクルと歩調を合わせた社会目的追求への変革にもとづくものであることが明らかにされている。

本書では、ベドフォードが「社会は常に変化する。それにつれて、会計もまた変化していかなければならない」という一貫した考え方が示されている。アメリカでは、エンロン事件により会計システムの信用が失墜し、その後サブプライム問題が発生した。近年では、IFRS導入問題で経済社会は揺さぶられ、社会は大きく変化している。著者は、「より良き明日の社会のために、会計はどうあるべきか」という問いに対し、ベドフォードの理論および思想に触れることで、ひとつの解を見出すことができるのではないか。ここにベドフォード理論が現代社会においても有用な理論であり、現代的な意義をもつ所以であると主張しているものと思われる。

本書は、ベドフォードの著作を幅広く網羅し、それを体系的に整理したうえで、ベドフォード理論の中心概念である操作主義理論を深く掘り下げるといった困難な作業を成し遂げた研究書である。学説研究という長い時間と地道な作業を経て出版された素晴らしい研究書を高く評価したい。